女學雜誌

第二百六十四號
明治二十四年五月九日發兌

二宮尊德

批評
濠洲及印度
西郷南洲
三日月
日本教育論

天狗世界

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 264.　　MAY, 9HT.　　1891.

EDITORIAL :—To Serve, not to be Served.

MISCELLANEOUS :—"Ninomiya Sontoku or A life of Self-denial ; A widow's Vision (a Poem). Unposhi ; the Russia of To-day ; Women Plus Time.

NOVEL :—Courtship of "Miles Standish" ; "Shikai no Arashi (A Story of persecution in Japan in the 16 th Century).

CRITICAL NOTES :—"Austria and India" ; "Life of General Saigō" ; "Mikadsuki", a Story of Chivalry ; "Education in Japan".

HOUSEHOLD :—The pleasures of keeping House ; Household Book-keeping.

SEED THOUGHT :—"On Marriage" ; Children's Logic.

NOTES AND NEWS.

QUESTIONS AND ANSWERS.

CONCERNING WOMEN.

NAMES of Graduates from Different Girls' Schools in the Empire (2).

第二百六十四號目次

社說　天狗世界

雜錄　二宮尊德先生（報德講開祖）○想夫行（韻文）（其二）（磐峯子）○脊士黨の發現○晩近三年間米國婦人の進步

批評　濠洲及印度○西郷南洲○三日月○日本教育論

文學　和歌教育（東京案山子の舍社中）○金言五則

家政　總理大臣兼内務大臣（家政を樂しむべき事）○家政簿記○百五十圓家具調達覽

隨感　婚姻箴（方寸子）○小兒の論理（川合信水）

時事　新總理大臣○條約改正○アンチ、フホーレン○伊藤伯大隈伯○時事通信○札幌製糖會社○英國商人○獸類逆待論○社會問題○婦女勞働者○盲人○外賓に對するの禮○合閤揣々乎○去就離合

女報

通信

週報

物價

日本全國卒業女學生姓名一覽表

廣告

回漕曳船新造廣告

弊店儀昨年來回漕營業罷在候處誠實と勉強とを以て諸方荷主に御愛顧を蒙り日增盛大に趣き回漕營業上當港第一流の御信用を賜はり候段弊店の幸福此上も無之此際一層諸方荷主の御愛顧に報せん爲め今般曳船蒸瀛丸を新造仕候に付ては弊店御依托の貨物に限り一定の運賃の外別に曳船料を要せず回漕仕候間御得意の便利殆んど他店の企及すべきに非ずに御加ふるに弊店は電話器をも据付けあり賣買上の御掛引き座して御辨理を達すべく確實機敏勉強の回漕業は常に港中弊店に限るとの御稱賛昨今嘖々として全港に溢れ候仍て不相變御愛顧被下度此段廣告申上候也

横濱市元濱町一丁目一番地回漕業

横濱電話番號百〇四番

前井上藤太郎

稅關

醫科大學産科婦人科及小兒科病室參考書
群馬縣其他師範學校高等女學校幷小學用書
醫學士三島通良先生著

はゝのつとめ

親の卷　妊婦産婦の心得　定價金三十錢（郵稅二錢）

子の卷　日本育兒法　定價金四十五錢（郵稅四錢）

右は我國無雙との好評を博したる母子衛生書なるが今般增補訂正の上再版したりクリスマス婚姻出産の贈物としてこよなき好品なり。

廣肆　通三丁目丸善。表神保町中西屋。馬喰町島利。春木町島利支店。通擔町中央堂。

下六番町　女學雜誌社

女學雜誌 第二百六十四號 明治二十四年五月九日發兌

社説

天狗世界

或人は日本人を評して屈し易しと云へり、屈するとは屈むの義なり、例するに腰の低きが類か。或人は、亦た評して、日本人は英雄崇拜の民なりと云へり、英雄を崇拜するは偉人に服するの心掛けにて、實直殊勝の事なり。日本人の性格、果して、斯の如きか。左らば、一たびは賀せざるを得ず。

内閣の樣子を漏れ聞けば、各大臣互ひに總理の位地を讓り、謙退世の常ならずと云ふ。蓋し三代の美風あり。政黨の景況を傳聞すれば、新規の役出づるとき、重なる人交々之を避くる由。蓋し功を人に薦むるの善徳ならめ。日本人は果して謙退温讓の民なるを知る。

然るに實想は常に左るとも思へず、樣々の不思議現に少なからぬを見るあり。夫れ、讓るとは妨たぐるにあらず、薦むるとは斥ぞくるにあらじ。然らば、任を重しとして之を人に讓るは可なり、既に之を讓らんほどに其任を重しとせば、一介の力を添えて當路の役者に補助し、以て其勢の万一を救わんことを希圖せざる可からず。然るに之を他に讓ると共に他を仇敵の如くにし、重きを之に嫁して更に一層の心配を課せんとするは何事ぞ。吾人頗ぶる怪しむ。

故に云はく、讓るものは責を避くるなり、薦むるものは勞を逃るゝなり、互ひに下ることを欲せずして各自他を使役せんとを欲し、我のみ英雄ぶりて、他を下郎となさんとし、我れ万人の主となりて、万人を我が奴僕となさんことを欲す。此に於て、日本國中、我より高きものは富士山のみ、之に次ぐものは我が鼻とすと覺悟し、位ひ人臣を極め、威權億兆にすぐるるなくば、滿足せず。

但し万人皆な同じく此の大望ありと云ふに非ず。左れど、極小なる區域に居て文學者なりとの名を得るにても、又小人數の教會に於て大牧師なりとの名を得るにても、二三十人の政黨に於て幹事世話人なりとの名を得るにても、何れか皆な、之と類を同ふするの大望ならざるべき。鞍馬山に跋扈するものも天狗なり、木の葉をまとふものも天狗なり、鼻の

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

高きもの、何れか天狗にあらざるべき。

天狗は常に斯く思へり、我もし出でずんば蒼生を如何んせんと。數度び胸を撫して切りに歎息し、我にしてもし斯る些事に蹈躇せば、それ天下を何如んせん、我に於ける天職他に存す、此の一小件の爲に煩勞辛苦するの價値なしと。則はち、終始現在に心を安んぜず、只管ら未來に掛念す。

天狗は亦斯く思へり、我の技倆凡ならず、學識鼻と共に高かし、天の我を世に生ずるや偶然ならず、一生權を大ひにして己が所存を施こし、以て天工を助けずんばある可からずと。則はち、人に服することを、節を曲ぐるものゝ如く感じ、人の上に立つことを、天に登れるが如く思ふ。

彼等は一生、大事件〳〵と望む、而して遂に大事件に當ること能はず。彼等は一生、人を使はん〳〵と云ふ、而して遂に人を使ふこと能はず。彼等は一生、恐ろしき勢力を張らん〳〵と希ふ、而して遂に威權を張ること能はず。

人望を僅かに繋ぐ頃ほひは、鬢髪半ば過る迄で脱け、多少人の上に立つ年配には、腰すでに曲り、意見やゝ行なはるゝ時節には、足の運び數歩を超へず、所望十が一に屆かずして命途既に盡き、空しく遺恨を懷いて冷土の中に沒することあり、七十年の誇りを後悔して、覺悟生れかはり、第二世の幼な兒とあるの曉きは、則はち一生を辭するの終に臨む。あゝ、徒らなる人の命の敢果なさよ。

吾人は多少の偉人傳を讀みぬ。左れど、未だ嘗て自から偉なりとするの眞偉人ありしことを聞かず。所云る英雄豪傑とは、人の指ざして之を評したるの遺辭のみ。當人自から我は英雄豪傑なりと廣告して而して衆同音「然り、左樣なり」と贊成したることを聞かず。所云る、眞の英雄は自から其英雄たることを知らざる也、人の評するによりて初めて自己の英雄たることを知る。而して、其の自己を英雄なりと知れるの日は、則はち其英雄たることを失なふの日也。大ひある偉人は、遂に終り迄で其偉なることを覺らず。於此乎終りに至る迄で、偉大なり。

パーチルは珍らしき人傑なりき、然れども彼は未だ嘗て自己を以て人傑なりとせざりき。去年來、彼れ逆路を行て大に激し、自から省みて揚言することあり、「我にあらずんば、愛黨を率ゆるに堪へず」と。而して彼が人傑たるの資格は此時より失せぬ。マッカセー、之を責て云く、古へより、我は此地位を

退ぞくべき人物あらずと自信して、而して能く其地位を神聖にしたるもの、一人もなしと。見よ、三たび讓りて位に就かざりし帝王は、遂に千古の名天子なりき、指命を聞きて戰慄し懼れて逃げ出したる大將は、遂に百世最上の大元帥なりき。

吾人は、英雄ぶる人に遂に英雄あるを見ず。

主と僕と何れか尊とき、上と下と何れか尊とき、使ふと使はるゝと何れか尊とき。吾人は世論の誤まれると既に久しきを悟る。一身の靈を捧げて人に伏事し、万づの慾を制して人に使われ、望み易き主の地位を棄てゝ、堪へがたき履を執るは、人間高尙の善德中、何如に最とも美なるとぞ。

吾れもし人を使わんとせば、人は決して我に使わるゝとなし。我れ人に使はるゝとを樂しみとす、此に於てか人知らずして我が爲めに役事す。是れ人情微妙の關係にして、世界の眞相總て斯の如くならざるはなし。われ下男下女の爲に、其勞を心配し、其働らきに苦慮す。我は猶ほ彼等に使わるゝが如し、然れども、下男下女は遂にかゝる主人に一命を捧ぐるあり。友人の爲め艱苦痛癢に投じ、其危急を見て之に死せんとを欲す。われは彼が爲に使わるゝものにあらずや。我に此の眞情至誠あり、故に友人も亦た我に一身を擲うつ、我に使ふると之より更に親しきものあらんや。

老西郷は、人を使わんとせし乎、將た人の爲に使はれんとせし乎、彼は全身を國民の爲に捐て、一生を之が爲に役せられんとせり。故に國民は、樂しみて彼に使わるゝものとなりぬ。彼は、私學校書生の爲に、其一命を與へたり、故に數万の隼人は悉とく之に使はれて死しぬ。

今の人、切りに己れを利せんとし、暴りに構へて人を役せんと計る、此を以て遂に一個の眞僕をも有すると能はず、何を以て能く、黨員を率ひ、總官を總ぶるとを得ん。今人の相ひ讓るが如きものは、相ひ反くなり。相反きて和合せざるは、互ひに人を役せんとするに因る。連日歎ずるものあり、今の形勢は、大政黨を造ると能はず、强固なる內閣を造ると能はずと。然れども若し能く一身を犧牲にして衆の爲に使われんとする大量大仁の人出では、亂砂整然として合し、玆に一大朋黨を堅造するとを得ん。此に於てか、之を上にすれば强固の內閣となり、之れを下にすれば、廣大の民間黨となる。苟くも然らず、天狗橫行して相下るの風速かに起らずば、日本の民心長久に亂散せん。天道と人情とを知る古今第一の聖人は曰く、爾曹もし人を使はんとせば、先づ人に使はるゝものとなるべし。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

雜録

二宮尊徳先生

天下沓に流れ、人借財の中に放蕩せる、文化文政の頃ほひ、相州柏村より偉人産れぬ。二宮尊徳先生是れ也。二兩の田地を持てる貧農夫の子にして、年少く兩親を失なひ、叔父の許に厄介になりて、日も足らざるほどに刻苦勤勉し、薪を採るのいとま〳〵、夜る人寢しづまりたる曉近く、僅かに大學一卷を能く讀みて慨然聖人とあらんとせり。

斯て先づ祖先傳來の田畠を取かへし、一家を盛かへして僅かに衣食するの料を納め、殘れるは悉とく、人に施こす。之より、小田原侯の家老服部十郎兵衛に懇待せられ、止を得ず其家の改革に從事し、五年にして之を復し、后ち小田原侯の常ならぬ命によりて野州櫻町の改革を擔當し、十餘年にして之を成就し、遂に中村藩主相馬充胤の師となるに至る迄で、至誠を以て一貫し、天地の恩に報ゆるを骨髓となす、一生の事業、犧牲獻身にあらぬはなし。こゝを以て偉人たり。

吾人は左に、その服部十郎兵衛を助けたる一事を擧げて、他を推し考ふるの種とせん。

蓋し、小田原侯の家老服部氏は、世祿千三百石、代々重役の家にして一藩之を敬す。然るに家事不如意にして借財千有餘金となり、元利共に償ふと能はず、百計此憂ひを除かんとすれど其術を得ず、貧困の爲に將に其職を辭せんとす。或人の告ぐるやう、柏村に金次郎と云ふものあり、極貧の家に生れ早く父母に離れ家産悉とく他人の有となり縁者の救助を以て稍やく人と爲りぬ。千辛万苦を盡し僅かに米壹苞を作り出せしより、之を種として終に廢家を再興せり。加之、幼若の時より他人を憐れみ身の艱苦を憂ひざるの所行、天性非凡にして常人の及ぶ所ろにあらず、君此人を賴み厚く之を遇し一家の再興を任せば彼必らず義に感じ心力を盡して子の家を興さんと。

服部氏大ひに悦こび、速かに人を遣して之を依賴せしむ。先生固く辭して曰く、是れ容易の事にあらず、我れ百姓にして百姓の事を行なひ廢家を興したるは異常ならず、たゞ百姓の業を勸めたるゆゑ也。今ま服部君の世祿一藩に冠たり、然して此借財を生じ衰貧極まるものは、士の家を治むるの道を失

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

なひたる爲にあらずや。然るに、百姓の身にして士らひの家を興すは我の知る所ろに非ずと。

服部氏之によりて益々其賢あるとを悟り、いよ〳〵信義を盡し委頼すると再三再四に及ぶ。先生於此て慨然として曰く、服部氏は我領主の重臣なり、今ま艱難の爲に職を退ぞき其家も亦た廢滅せんとす。而して其興廢我一人を期し、節を屈し其道を盡して我に依頼す、我之を救はずんば彼必らず廢せん、然らば彼廢するときは君亦之を憂ひ玉ふと豈に淺からんや、今は服部一家のみの不幸にあらず、實に我國一藩の急なりと。

則はち妻に談りて曰く、服部氏の委頼已でに迫れるとは御身の知る所ろなり、我今より彼の家に至り之が爲に力を盡さん、御身定めて當惑ならんが、我爲に家を守り家事を勤め玉へ、五年にして彼の憂を除き之を安堵せしめて家に歸らんとす、御身受引き玉ふかと。妻感激涕を流して答ふらく、謹しみて仰せを聞けりと。

是に於て先生、服部氏に到り、君の艱苦を除んと必らず五年の內に在り、左れど內外皆な某に任し玉はずんば能はず、聊さかたりとも君が存意を加へ玉はゝ某の微志を遂ぐると能はず、然らば初めより辭するに若かずと。服部氏悅びて曰く、詮方盡き思慮失せ遂に子に依賴す、何を以て愚意の加ふべきものあらん、興廢ともに子が一身にあり、子十分に改革せよ、余は何事にても從はんと。

先生則はち毅然として曰く、祿千石餘にして千兩餘の負債あり、是れ世祿の名ありと雖ども實は已でに悉とく他人の有となれり、大夫の勢力を以て之を返さず今日を送るが故に此家此祿を以て我物なりと思ふは豈に淺ましからずや、上み君恩の無量なるとを知り、常に節儉を守り、家を存して永く君恩を報ずるの忠勤あるを以て臣下の道とすべし、然るに身の奢侈に流るゝとも知らず不足を生ずと雖も猶ほ其本を顧みず、他人の財を借りて之を補なひ元利增倍一家廢滅の大患を慮らず、終に家を破り君恩を失なふに至る、豈之を忠義の臣と謂はんや。服部氏伏して其罪を謝す。先生曰く、子今ま其過ちを知れり、然らば其過を補なはんとを勤むべし、其事何ぞや、必らず其身を責むべし、其身を責むるとは、食は飯汁に限り、衣は綿衣に限り、必らず無用を好む可からず、此の三ケ條を

守るべきか否や。曰く固より甘んずる所なりと。是に於て先生其家の僕婢を呼びて曰く、主君の家事既に此に及ぶ、斯して三五年を經ば主家將に覆へらんとす、汝等若し無事永續の道を知らば明らかに予に告げよと。皆曰く、私供何事を知らん、願わくは足下之を好きに計らひ玉へと。先生曰く、汝等主家の無事を厭ひ予一人に計を請ふ其忠志賞すべし、以來主君自から思慮を加へず、五年の間家事を我に任せたり、汝等も我が指揮に隨がひ異存ある可らず、我と共に主家の安堵を願ひ勤むべきか、若し異存あらば今速やかに暇まを請ふべしと。僕婢皆な曰く、主家に仕ふると已に年あり、今ま其危ふきを見て退ぞくは我等が願ひにあらず、予一身を勞して主家を安んぜんとす何んぞ其命に隨はざらんと。

先生此に於て入を量り出を算へ、正しく分度を立てゝ中分の活計を定め、家の制とし、貸主を悉とく呼びて實情を諭し、償ふに五年を約し、自から奴婢に代りて家事を勤め、服部氏出れば若黨となり、歸りては家を治め國を治むるの道を服部氏に教ゆ。五年にして、千餘兩の借財皆洗ひ盡し、金三百兩を餘せり。一家の悦こび譬ふるに物なし。先生此の三百兩を持ちて服部夫妻に告げて曰く、五年前、子の委賴を辭し難く、其請に應ぜしより、今日に至る迄、晝夜心を盡し已に借財を盡とく拂了り、金三百兩を殘せり、畢竟予に任するの固きが故に此の困難を除きたり、依て百兩は君に呈す其の手元に備へ、別物として非常の時、國君へ奉仕の用となせ。又百金は婦君是迄艱苦を盡し夫家の再興を勤められたる賞として呈すべし、婦君も之を別途に備へ家の再たび衰へざるの豫備となせ。尙ほ百金を餘す、此は君が志ざす所ろの用に充てよと。

服部氏只管らに感歎し、曰く、我家已に顚覆せんとする時、子の丹誠によりて今全く再復せり、何を以て恩に謝せんか、未だ處すべき所ろを知らず、此餘金は我金にあらず子の丹誠に出る所ろなり殘らず呈して謝恩に充んと欲すれども、子今ま我夫妻に別ちて後來の事を教ゆ、又辭す可らず、責めて此百金は子之を受け家業の一助とせよ、子家にありて業を勵まば許多の富を得べかりしに、五年家事を抛ちて我を危急に救ひ安永に得せしむ、此百金何ぞ謝意に足らんと。

先生大ひに悅こびて曰く、子の言斯の如し、速かに貴意に隨

がい之を受ん。扨て一旦の憂ひは除きたりと雖ども、后年の定則なくんば又復た艱難に陷いるべし、預かじめ之を憂ひ、永年の分量を調のえ置たり。以來、千石を以て永年の分限を定め、三百石を以て餘外とし、別途に備え非常の奉仕の用に充てば、此家あらん限りは、君公への忠義は申すに及ばず、一家の貧窮を生ずるとある可らず、子之を守れと。

かくて台所に出で、奴婢を悉とく呼び集めて曰く、主家の危急極まり主人余れに托して仕方を爲さしむるとき、汝等約を差へず五年の間我と共に艱苦を盡せり、賞するに餘りあり、千余金の借財今すでに皆濟し、尙ほ百金を餘せり、主人予が愚誠を賞して之を與ふ其志辭ろふべきにあらず、左れど予が五年間の勤めは一身の爲にあらず、何をもて其報ひを受ん、故に汝等が勤苦を賞し之を分ち與へん、然し乍ら之れ我が與ふるに非ず主人の賜ものなり、謹しみて受よと。百金を悉とく分與す。

此に於て万事了れり、先生一物をも受ず、瓢然として家に歸り、妻が勞をいたはり、以後亦た元の如く鋤犁を執りぬ。

女學子曰く、先生が人に敎ゆるを見るに、先づ人をして悔改せしめ、其自然の性、至眞至誠の所ろに復せしむるとを旨とす、此に至らずば生れかはりたる改革は出來ずと云ふ。斯て、一家一村一國を改むるには、先づかゝる改悔したるもの一人を要す、其人なくんば決して他を化すると能はずと云ふ。云く、其理は瓜より茄子を生ぜざるが如し、至誠の人出でずんば決して人を至誠にすると能はず、人至誠より發せずば天に報ゆるの善行を爲すと難しと。而して一人より多くの人を化するは、たとへば、一石の粟十石を生ずるごとしと云ふ。所說の凡なる所ろは即はち大ひなる所ろにして、聖賢の言常に如此し。われ少くして先生に服し、多年其書を讀む、近く八九年基督敎を信じ、年毎に其眞味を解し得ていよ〳〵先生の人と爲りに服す。蓋し人情二にあらず、天道たゞ一つなれば也。

想夫行

雲峯子

其二

現つあらぬうつせみの世は夢の内に
見えつることとやまことなるらん

波の音さむく秋たちて、
志賀唐崎にふく風の
ひゞきも今はかはりけり、
堅田のいほばいろづきぬ
粲山子に匂ふ夕日かげ、
消えゆく空にうちむれて
ねぐらにかへるむら鳥の、
ゆくえはるかにながめても
うらやましくぞ思ふらむ、
空にあるてふあまの川
ふかき流れを渡りても、
年に一度逢ふひとの
ありとこそ聞け我は今、
いとなつかしき我夫に
あひ見ることもなき暮す、
月日つもりてふた年と
なりにけることぞ悲しけれど、
かこちごゝろの切なさに
ゆめも結ばでなきあかす、
夜も多からん、年折なば
ちりやはてなん萩のつゆ、
ひろひあげなば消えはてん
小笹が上のあられにも、
くらべん程に玉の緒の
いとはかなくもなりはてぬ、
あまならぬ身に海人となりて
住みわぶることそあはれなれ、
いづれ消ぬべきつゆの命
今宵手づから果てなんと、
懐劔かた手にとり出し

暫しながめてありけるが、
なみだを拂ひ云ひけるは
「ことをかたみにと殘しける、
夫は遙けきいくさ地に
まだながらへて在すらん、
幽明、境を隔つなる
人と人だにあひにきと、
ふるきためしもあると聞く
我身も夫と世にあらば、
また逢ふ事のなからずやはと
思ひかへしてやえばをば、
錦のふくろにおしつゝみ
また膚身にとそへにけり、
かくて夜もはやふけぬれば
ねやの板戸をもる月の、
かたぶくかげをながめつゝ
あまは思ひにくれにけるかな。
伏屋の閨にかすかにも、
今ぞきこゆる笛の音は
たれかふくらじ小夜ふけて、
訪ひ來む人はあらじとて
いぶかしみつゝ窓の戸を、
細く開きてながむれば
月のひかりは皎々と、
てらさぬくまもなかりけり
北山の端にむらさきの、
一村くもの見えけるが
追手の風にまかせても、
西のかたにとなびきけり
近づくまゝに笛の音の、
いとさやかにもありぬれば
ふせ屋のあまはたちあがり、
とはいぶかしと見るほどに
ひとりのものゝふ駒とめて、
さやけき月に笛ふきつ
雲にのりてぞいたりける、
近づく見ればものゝは

赤地にしきのひたゝれに、　白糸おどしの鎧をつけ
五枚かぶとの緒をしめつ、　水練栗毛の駒とめて
しばし休らふすがたなり、　海人はこゝろに思へらく
笛のひゞきはまさしくも、　建武のむかし都にて
聞きおぼえしにまがはじな、　見ゆるすがたはなつかしき
左中將にて在はすらん、　御顏はそれと分かねども
都をたち出で給ふとき、　つけしひたゝれこれならん
駒も見まがふやうもなし、　岩間によする白波の
知らぬかたまでゆきかへり、　心くだきてあひ見んと
待ちにしひとのかげなれば、　いまゝのあたり遇ふことぞ
いとゞうれしと思ふらん、　やよ左中將待ちわびぬ
さらでも人はこひしきに、　ふく風さむき秋の夜の
ふけゆく頃のさびしさは、　たとへんものもあらずかし、
などり惜くも別れしは、　二年むかしとなりにけり
今宵かへらせ給ふこと、　うれしきことの限りぞと
なみだながらにかたれども、　雲井の人はひと言も
云はざりければ海人はいま、　聲のかぎりに左中將
やよ我夫とよびけるが、　なほもいらへはなかりけり
海人は庵をはしりいで、　やよ我つまとよびければ
見えにしひとは來し方に、　雲とともにぞかへりける
やよや暫しと聲あげて、　走らんとする折しもあれ
夜嵐たかくふきたちて、　閨のいたどに音づれぬ、
あまはねざめつ思ひみて、　さては今見しものゝふも
笛の音なりときゝつるも、　夢にやありけんはかなくも
見えつるものかな我夫は、　今はこし路にあるものを
いかに遇見んすべやあると、　忘れんとすれど忘られぬ
すがたはひるのうつゝにも、　見えこそ渡れ世の中は
水にうかべるうき草に、　ともなふかげに似たるかな
いかにうつゝに遇はん日の、　待たるゝかなと獨りごちて
夜をばあかしつあくる日も、　またもの思ひにぞ沈みける
夫に分れて海人がやに、　うき年月を送るてふ
心のうちやかあしかるらん。

●正誤　此篇もと過去の事を寫すものなれども之を現在の如くかくこそよからめ、英語の所謂ヒストリカルプレセントなるものなり、故に前號中第五面下段九行なげきけんはなげくらんと正し、仝十一行なかめけんはながむらん、十八行わびしかりけんはかるらん、第六面上段十二行多かりけんは多からん、十四行心地しけんは心地せん、仝下段一行こぎにしはこぎゆく、なりけんはならんと正す。

魯士亞國風俗一斑　（接前號）

トルストイ伯の著述にして社會の狀態を寫せる一書あり、其中に記せる所は實狀なりやと問ひしに、答へて曰く、余の見る所を以てすれば露國人民の德義は決して他の歐洲諸國より下らず、吾等は露國の人口一億一千萬あるを思ひ、亦人民には高等社會より最劣等社會に至る迄種々樣々なる人あるを思へば、不義不德の者多きも亦止を得ざる事といふべし、平常は人民黨を組みて相分れ、互に水火相容れざるが如く見ゆるも、等しく是國を愛する者なり、故に外患到るの時は皆力を合せて敵を防ぎ、國を守る、露國は不忠不義の者充滿するが如く云ひなすは抑誤れりといふ可し、余の觀察にして正しくんば露人の狀態は通常世人の云ふが如くならず、思ふに露國は愈進步して後來世界の歷史に大書すべき運動を爲さん、余は露國の農者を愛す彼等は懇切にして快活なり、頓才あり想像力に富み、頑迷ならず、只其欠點と云ふべき二點は遠謀なきと酒を嗜むとなり、彼等常に曰く「神は我等に豐なる收獲を與ふ」と、而して貯蓄を爲す事なく、手にある所の財貨は消費して餘す所なし、彼等が神と呼ぶ事の多きは、彼等が信仰厚きに依るにあらず、寧ろ彼等の口癖といふべきなり、露國政府はボドカと云ふ酒（麥及び芋類より製するものなり）に課稅し、之が歲入中最も多額に至るを喜こぶものゝ如し、是甚だ不可なり、尙一層不可なるは社會一般に酒類の賣買を奬勵するの風俗ある事なり、宗敎上の集會に於てすら僧侶を始めとし、會するもの酒を飮まざるはなし、彼等は云ふ我等は嚴寒なる國土に住み、快樂とてなし、酒興を取るも之止を得ざるなり」と、されどトルストイ伯の如き賢明の人ありて既に禁酒會を起せりといふ、禁酒會を設けしを見て、人民は、

伯を狂人なりといふ

左れど一般の人皆然りと云ふにあらず、伯が慈善家たる事は人多く之を知る、禁酒會の如きも賛成する人多く既に同盟して禁酒せる村落數千ありされど、富豪の酒商自資を以て酒を强賣する事ありて、折角風儀の改まらんとする所も、稍もすれば亦敗亂に陷らんとす、酒の害惡の恐るべきを見とめたる人は、堅く團結して禁酒會を組成す、會員殆んど千五百萬人あり、是皆國敎を奉ぜず、數宗派に分れて各好む所を奉ずるの徒なり、或宗派の人々は非常に迫害に遇ひ、他は然らず、是國敎と異る所の度合によるものなり、彼等は新約書を信じ、凡ての集會をわが好むまゝになす、彼等は國敎徒を目して繪像を拜する者なりと云ふ、斯る人々は皆コーカサス地方に送らる、彼等は國中にて最良の人民なり、彼等を護送する警吏一日余に語て曰く、コーカサス地方は斯る新敎徒を以て充つるに至らば、警官若しくは他の官吏を以て之を制禦するの必要なかるべしと、蓋し無爲にして治るの意なり、

露人迷信の甚しき例

中には迷信に陷れるものも多し、甚しき例を擧ぐれば鸚鵡を（新敎徒の外）養ふて祈禱を爲すの風を敎ふるあり、祈禱の文句を車に粘附し、傍らに於て始終之を轉するあり、或時の事なりけり、黑海を渡る水夫病ありとて僧侶の救治を乞ひしに、僧は茶碗の内部に指もて經文を書き、之に水を盛りて藥なりとて飮ましめけり、病者も之に依りて愈えたりと云ひき。

米國婦人の大進步　（其四）

今より七十二年前エムマハウヰード夫人はニウヨークに於て高等女子敎育の意見を述べ、當局者にも建白せしが遂に採用せられざりし爲め其企望を變じ、決して女子を大學に於て敎育すべからず、亦演說抔は女子敎育に必要なきものなれば之を爲さしむべからずと公言せり、之を今日に比較すれば其差果して如何。嘗てトレモントテムプルに於てルーシーストーン女史と共に或二女史も演說を爲せり、その內に云へる事あり、女子敎育の未だ始まらざるに先たつ事百五十三年にハーヴアード大學は建設せられしと、又曰くボストン府に於て男子敎育の制始まりし後百三十年を經過せしも女子は當年中の或時期には敎育を受くる能はざりきと、斯く女子敎育の事は遲くなりしといふは信じ難き所なれど女子に適當の敎育を受けしむるに至りしは少なくとも男子敎育の始まりし後六十年を經過したりしならん、前大統領がニウヨークにて演說せし時アンナ、ヂツキンソンは我國（米國）內亂「南北戰爭の事なり」の頃女子演說家として最も衆に擢拔せし人なりしと云へり、されど是より久しき前女子演說家として特別に名けられし事はなかりき、そは一般の人が女子演說を當然の事として見ざるが故なり、即ち女子の位置高くなりしと共に敎育も盛に行はれしといふにあり。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

今觀察の點を變して去る四十年間我等女性が政府との間に於て如何に權利を得たるかを見よ、今より三年前ボストン府に於て學校の事に付問題の起りし時女子にして投票を爲せしもの一万九千人の多きに至りしなり、今合衆國二十二州に於て何處にても學校問題につきては女子は投票、撰擧等の權利を有す、カンサス及びチクラホムの二州に於ては尙他の政事上にも參するなり、ワ井チミングヾ州にては女子に參政の權を與へ全く自由ならしめたる事憲法の明文に存す、彼州の一女史其自由を得國政に與かるに至りたるを喜び、詩を賦して以て祝意を表せし事あり、其意に曰く。

世界第一の共和國、現今を厚遇す、(女子を優待し、今日に於て國家幸福なるの意なり)、その國旗は氣情山の嶺に飜へるなり、原野にも低地にも店頭にも金鑛にも同權平等の星は等しく光輝を放つなり、その靑色のうちより聖光を放つなり、聖光は即ち善英の表章なり。

云々と、ジョン、ブライト云ひしにあらずや、法律を實施せんが爲めに國民の眞心に制裁を加ふるは是暴虐なりと、此明盲卓識を眞理ありとせば、苟も國家人民を愛する女子は皆參政の權を有し、男子と共に撰擧權を得るは誠に至當の事といふ可し、過般新たにカンサス州より撰出せられたる某國會議員は說ひて云へり、

二十世紀の初期より、合衆國は其國民全体によりて支配せらるべし、此好運めぐり來らば女子は撰擧權を得、男子は飮酒の事を絕つに至らん、

云々と、國政主宰者即ち大統領撰擧の先登を爲すはワ井チミングヾの女子にして愈來年より(千八百九十二年)實行すべし、されば次期の大統領たるべき人は自由權を得たる女子に始めて撰出せらるるにて古今未曾有の光榮と云ふ可し、蓋し此時より女子の政務に勤むる人多く出づべければなり、ヨシ他の事に於ては爲し能はずとするも遞信局の事は必らず爲すに至らん、益々女子に權利を得せしめ女子の位置を高からしむるものは大學、政府、寺院等の纎弱男子にあらずして寧ろ農者野人の徒、商家工場に養はれたる輩なり、彼等は實に義俠の念に富み、女子の賃銀低廉に過ぎ、將に飢渴せんとするを見て同盟罷工を爲せり、彼等は云へり、同等の仕事を爲せば同等の賃銀を女子にも與へよと、彼等は演壇に立ち我等は投票權を有す、女子にも與へざる可からずと云ふ、今日男子の勞働時間は八時間と女子の十四時間との不平均なるを改め、同等平均ならしむるものは必らず彼等なる可し、されば女子は好助手によりて益々權利を擴張するを得べし。

批評

○濠洲及印度

漁　泉　子

近來餘り面白き著作を見ず。三島一雄君が寄送せる「濠洲及印度」を讀み、久し振りにて快樂しぬ。志賀君「南洋時事」以來、類ひ少なきの著とす。凡そ世間一と通りの遠征日記は、大抵所々の案内記を反譯せしに過ぎず、偶たま意見を挿さみたるは、其邊りの新聞論を覗みしなるべし。南洋時事と此濠洲及印度との面白きは、斷じて此の弊なきにあり。故に記事の精密に至りては申分少なしとせず、觀察の點に於て就中豐富ならぬ心地すれど、到るまに／＼無限の感慨を湛え、景に隨つて千万の情緒を亂すの所ろ、極めて味ひあり。尋常の旅日記に異なる所以即はち此にある也。斯て、セント、キルダに於ては、宇宙同一の大哲理に感じ、

斯の如く同一又同一の世の中に血渴せる聲にて不奪則不厭と呼ばしむるものは何ぞや、曰く所有の懸隔是れなり、千年の昔し大儒蘇東坡は赤壁の風月に對して此大眞理を看破せり、氏曰く唯江上の風と山間の明月とは我と汝と執りて

盡くるとなし是れ造物者の無盡藏なりと。幼時赤壁の賦を學びて其意を知らず今にして以上の文字が仰いでチーチウアの同一を視、俯して人類社會のミゼリーを視、萬古に亘りて解釋す可らざる大問題の淵に沈みたる大儒の口より出でたるを知れり。

と慨し。又濠洲の大ストライキ、ユニヲニストの大集會などを見聞しては、ワイキヽの刈野、ヒロの磯邊、晩烟立籠りたるマウナ山の麓に、社會問題が日に〳〵吾等人種の頭上に迫り來るとを痛憂し。又た、印度ボイソニズムの敎父、ラダー、ラマン、パインに會ひては、

予は未だ嘗て天地を以て盲目無意識のものと認たむると能はず深遠不可測暗々妖怪なる大塊と思ふなり、殊に万里漂泊の中、氣を鬼にする間にも電光一閃心の底より悲しき思ひ現はれ低回顧盻の涙に暮るゝとあり、

と答へて人情の秘奥を白露したるなど、想じて凡常の意想にあらず。かゝる思想を有する人の前途、甚はだ掛念せらるゝなり。但し、人種勝劣の運に關し、憂ふる所極めて切、遂に平和慈善主義に杞憂するが如き、其他一二の大意見に於て、考ゑを同ふせざる節もあれど、凡そ血性男兒にしてアングロサクソンが器械的の大發達を實見したるものは、何人も一度びは非常の憂國家となるものなり。之を彼の舞踏玉突きなどを家づとにして歸る輕薄洋行者に比ぶる時は、雲泥の違ひも物かは。左れば寧しろ祝すべきなり。著者が殖民に女性を必要するの論(廿四頁)及び、日本今日の文明を熱帶文明の極度に達せしものとし、寒帶文明の洋人が之に懸戀する所以を解說して、我國を外人が花園茶樓と爲す可らずと慨するの論(二百頁)などは、頗ぶる吾人生平の所論に同じ。文章は多情にして甚はだ佳なり、蓋し名山大川を觀て秀文字あるの理か。但だ下卑たる淨瑠璃振の句調を所々に挿さみたるは、極めて遺り惜し。序文の中ち、儘よ狂一生と云へる工藤溝介氏の文一きは目立ちたれど、大隈伯が意見と題するもの最とも秀でたり、堂々たる大臣の卓論なり。

○西鄉南洲

靑森縣の人、櫻庭經緯氏の著なり。左して珍らしき實跡を掲かげず、亦秀拔なる議論もなけれど、傳の序で世の常に變り、通讀するに厭倦せず。讀むものをして一閱了せしむるは、文

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

才の凡ならぬに由る。

○三日月

「報知叢話」と云へる報知新聞月ギメの客にのみ配る附錄物の中にて、「三日月」と題する町奴の俠客傳は、見榮ありて中々面白し。作者、ちぬの浦浪六とは如何なる人ぞ、男達の心中を穿ちて快辭常ならず。文章は稍見劣りすれど、結構布置凡ならず。特に用意の緻にして奇ある、時々讀む人の意表に出づ。第三回、三日月、伊達摸樣の裾を蹴つて踏み出すときピヨコリと飛出たる瘦蛙を思はず踏み、「怪我だ、けがだ、許してくれ」と哀れがる所ろ。又た、同じ回の不動山秀五郎を手ぎわ好く放り出す一節の末、稻田に立る案山子まで、天晴男といひたげなり」と結ぶなど、妙に近し。但し、第一回、薄萱生ひ立つあばら屋にて、布子を人と思ひ、すゝきを劒と見まがふ如きは、何の度胸ぞ。前后に相應しからぬとなり。如何の伏案あるかは知らず、唯だ之を怪しむ。

○日本教育論

日高眞實氏の著なり、文章淡雅、所論周圓。喩ば丸山の如し、別に新奇の觀なし。謙遜の辭ばは如何にも君子の風あり。

家政

總理大臣兼內閣大臣

山下石翁

家政に巧みならんことを欲すれば、先づ家政を樂しみとせざる可らず。諺わざに、スキは上手の初めと云ふことあり、之を好かざれば、上手となること難し。料理を面倒と思ひ、勘定を物うしとなし、些細の事を煩わしきものとして放擲せんほどの人は、遂に家政に上達すること能わず。想ひ見よ、古來如何なる政治家ありて、己が思ふまゝに天下を支配したる。皆な志ざしを遂げず、空しく恨を呑んで雄志を埋沒したるにあらずや。然るに、妻は一家の政を己の思ふまゝに取扱かひ、大藏省の出納も、客あしらいの外務も、門々戶々を取しまる海陸軍のわざも子供を教育する文部のつとめも、郵便の出入を監督する遞信省の面倒も、下男下女を賞罰する司法の制めも、畠の作物、庭の樹木、手がいの鷄犬などを信切に養なひ、且つ出入の商人に取引する農商務の事務なんど、總て細君一手の監轄にあらずと云ふことなし。故に細君は八省の大臣にして、又總理大臣を兼ぬるが如し。見よ、此頃の總理大臣さわぎには、彼此と推合ひ

讓り合爭そひ合などの聲かしましかりしが、細君が着席すべき總理大臣の位置には、何人も非望を懷くこと能はず、細君特有の利益如此し。己がまゝに一家の政事を取行ふの愉快何ものにか比べん。蘇秦曰く、寧ろ鷄の口となるとも、牛の后へとなること勿れ。シーサー曰く、寧ろ一鄕村の長とならん、天下の臣となることなけんと。細君、細君、御身何のゆえに其位置を樂しみとせざる。樂しみ即はち上達の根元ならずや。

〇家政簿記

女學校の科目中には、是非とも家政簿記の一科を備え置かずんば不可なり。簿記を知らずして一家の經濟を好く整えんと殆んど難し。辛ふじて爲し得るとも、其勞莫大、而して間違ふと極めて多からん。扨て、之を學ぶとせんに、一週一時間の割にて、一年たゝば十分なり。敎科書には經濟雜誌社發兌の藤尾氏が著を好しとす。獨り學びする案内は、通信女學の簿記法に見ゆ。

〇家具一と通りの入費

通常要する所の裝飾器具は如何程要するかといふにもとより日本と西洋とは家の構造も異なれば器具も同じからず。左れど貴女雜誌(ザ、レデー)に掲げたるを左に轉載し、參考に供えん。こは百五十圓程にて一切を買調ふの計算なり。

(1)ヲヴァーマンテル(暖室爐の上にある棚の飾り)、六圓二十錢。(2)ヲヴァードーア(額面杯の如く裝飾品なるべし)、二圓餘。(3)敷物、八圓六十錢。(4)毛皮(二種、五圓餘のもの一ツ、二圓四十錢程の物二枚)合せて殆んど十圓計り。(5)窓紗(二種、一は四圓五十錢一は綿紗四ヤードまで一ヤード十錢のもの)合せて四圓九十錢。(6)窓紗棒、一圓八十錢。(7)寢臺、二十六圓二十錢。(8)籐椅子一脚、五圓二十五錢。(9)仝一脚、二圓七十六錢。(10)疊椅子、一圓八十錢。(11)戸棚、一圓九十二錢。(12)客椅子二脚三圓六十錢。(13)テーブル一脚、八圓六十錢。(14)竹机(茶を置く臺)、二圓四十錢。(15)客間テーブル(栗の木にて作れるもの)、十圓五十錢。木にて作れる臺、二圓五十錢。(16)花立、一圓二十錢。(17)屏風、二圓十六錢。(19)屏風に用ゆる絹、三圓十二錢。(20)爐邊の裝飾具、五圓。(21)火箸、足臺、其外の鐵器、二圓四十錢。(22)物置室、十三圓。(23)本箱臺、十三圓七十二錢。(24)書物臺、是は音樂の書物を載せる臺、一圓三十八錢。(25)坐蒲團二圓十六錢、外に三種、合せて七圓六十錢。總計百五十二圓餘。

小説

マイルス、スタンヂッシュの戀

第三回　意中人の使命（下）

愛山逸民

扨二人は坐して鳥と美しき春との物語せり、本國の朋友と明朝出帆すべき「五月花」との物語せり、やさしき清敎徒の處女は曰ひぬ、妾は終日思續けぬ、英倫の「ヘジーローズ」につきて終夜夢み、終日思ひぬ、今は其花咲く頃なり、田舍は渾て花園の樣にてありぬべし、畔や、畑や、雲雀や、紅雀や、村の巷路や、其處に往來し時々談笑せん爲めに立止れる鄉人や、路の端に立つ、常春藤のまとへる古き灰色の塔ある村の會堂や、其墓地の靜なる墳塋や、皆我夢に入り我念に浮びぬ、我等と共に住む人々はいと懇ろに我等の宗敎はいと愛すべきものなれども猶我心は物哀しくて古の英倫土に返らばやと思ふあり、御身は其は惡しきことなりと云へり、されど妾は堪難く思ふなり、妾は誠にさみしさと、はかなさとを感ずれば今日は古き英倫土に返らんとを願ふ心切になりぬと。

此時靑年は答へぬ、實に余は御身を責めざるべし、婦人よりも強き心を持つものにても此恐ろしき冬には氣もくづをれしなりまして御身は萬づやさしくて人に依り賴むを常とする女性にておはせば心强き身をよすべき人なくてはかなはじされば余は今プリマウスの尉官マイルス、スタンヂッシュが御身にあせる婚姻の申出をせん爲めに御身を訪ひしなりけれど。

斯くして彼は其使命を傳へぬ固より文字に嫺れたる秀才にはあれど言辭を飾ることをせず、美しき辭令を用ゐることをせず、小學の生徒の如くくど／＼と要點をのみ話しけり、尉官が自ら話したりとてこれよりはよも呆然たらじ。驚歎と悲哀とに因りて默然たりし淸敎徒の處女プリスキラは驚きの眼を睜りてアルデンの顏を打ながめぬ、其狀彈丸に打たれて耳爲めに聾し口爲めに瘖せるが如くなりき、しばらくしていま／＼しき沈默を破りつゝ彼女は叫べり、プリマウスの貴き尉官が若しさまで妾を娶りたく思はれなば、何故自ら來りて妾の歡心を得んとは勉められざりしにや若し來りて歡心を買はるべき程の價なきものならんには妾は誠に娶らるべき價値もなきものにあらずやと時にジョン、アルデンは之を辨解せん

と試て、尉官は事の繁くて斯ることに用ゆべき時を有せざりきといひしかば此斯ることといへる言が烈しくプリスキラの耳を激して事情は益悪しくなりぬ。此語を聞くと均しくプリスキラは閃光の如く速かに答へて言へり。彼は婚姻の前に御身の所謂斯ることに用ふる時を有せずとや、然らば彼は實に婚姻の後には斯ることに用ふべき時間を見出し、又其時間をば作らんと願ふにや、是は卿身等男兒の處置なるべけれども御身等は、我々女性の心をば悟らず又悟り能はざりけり御身等は多の女性を品定めして彼を斥け此を取らんと心を決し扨不意に唐突に思を打明け望を告げて后婦人が直ちに此迄思かけざりし戀に從はざればとて、一躍して高嶺の花に達せざればとて、怒もし、痛みもし、恐くは惡口をも云ことならんが、こは怪しからぬことあり、誠女性の戀情てふものは只求めたりとて得べきものにはあらずかし、戀を達せんとならば唯言のみならず之を表すべし、若し彼にして暫らく時を待ち妾を愛するの情を十分示したりせば老て無骨なりとはいへど御身等の尉官にても終には妾をなびかする時もあらんかされど今は斯ることあるべくも思はれずと。

ジョン、アルデンはプリスラの言に心を留めず、猶語つゞけ其朋友の懇望をば彼女に強んとてさまぐ\に説勸ぬ、尉官の勇武にして才幹あることにつき、プランダー人と戰ひしことにつき、神の民と共に難を受ることを決心せしことにつき、其熱心に酬ひん爲に推れてプリマウスの尉官となりしこと、生ながらの紳士にして其系圖は明白にラルフの子タルストン、ト、スタンヂッシュの孫なる英倫士ランカ州チユクスブリイ、ホールのヒユー、スタンヂッシュに溯り得べきこと、いと大なる土地を襲領せしかども惡計に罹て奪はれしこと、されど猶傳家の武具を有し其甲は銀色の冠赤色の小冠にして外は皆黄銅なる鶏を有することを物語れり。蓋し尉官は敬ふべき貴き寛仁なる人にして、彼は無骨なれども懇ろなり、プリスキラは彼が冬間婦人の如きやさしき手にて病人を看護しことをば知り、いかにいそがはしき時にても、氣のせく時にても彼は其手を人に與ることを辭み能ざりし、彼は强項にして嚴肅なる軍人にはあれど實に篤實温和なりき、彼は身幹の矮小なるが爲に譏笑せらるゝことなかりき蓋彼は心の大なるものにて宏量謹愼勇毅なればなり、プリマウスの女流否英倫士中の女流にして

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

若しマイルス、スタンヂッシュの妻と唱はるゝものあらば多幸にして誇るに足れるものと云ふべし。

されど彼が斯く其質撲にして流暢なる言語もて己を忘れ熱心に己が戀の競争者を褒めそやしもて行きしとき處女は微笑し眼もとに笑みを溢らせながらふるへ聲にて言るはジョン何故に御身は御身の爲めに語り給はぬにや。

紫海の嵐

みさを

第三回

星の光りは漸く殘りつゝ、夜將に曉ならんとす、臼杵の市街を西に向ひ、消えゆく月に鞭をあげ、たくましげなる黒毛の駒に打のり、急ぎゆく武士、鎧の袖のかへる音、曉の霜に冴え、兩眼遠く見張るが如し、駒のたて髪朝の風にあびき、蹄枯草を蹴る、鐘のひゞきも明けぬまに同伴をもつれず、一騎孤行、さして行えは果して何處。

臼杵城頭古木林をなす所、あけがらすなき立ち、城中夢いまだ殘る時城門に近づく一の騎士、いかに急ぐらん、馬を下ると見しが忽ち拳をかためて門を打たゝき「コ、開けよ、とく開けよ某は大友義鎮の次男親家なり、急ぎの所用にて罷り越しぬ、城主に就て物云はん、とく開けよ」と呼ばゝりけり、内より聽へて戸を開く守衛、ほのぐらきにすかし見つ、鎧兜に身をかため、長刀佩き、いかめしく裝ふたるを見、何事の起りけるか、武士の押よする事は如何なる故ならんと打驚き、亦戸を鎖さんとするにぞ、親家は大聲に叱咤し「疾く開けよ」と云ふに守衛は恐れて亦た戸を開く、かくて親家は二ッ三ッの門を打過ぎ、城主の住む御殿に近きぬ、亦人を呼び「親虎の住むは何處なりや」と問ふに「今は此御殿には居給はず、何處に往き給ひけん、知らず」と答ふ、親家は聲あらゝげ「臣として主君の住所知らぬ事やはある」と怒れども詮方なし、又城主に遇はんと思ひけるにや、御殿に使を馳す。

殿上雲靜かにたなびき、城主夢未だ平かなるに大聲あげて呼ぶ者あり、城主義親は大ひに驚き、其故を問ふに大友親家の來訪なりと聞き、且つは鎧兜を着けたりと聞き、心竊かに恐れけん、臣下に命じ「今日病ひあり、相見るを得ず」と云はしめけり臣下出でゝ報ず、親家憤懣に堪えねど如何ともし難

く歸らんとて立出づ、心事公明なれば世に恐る可きものなし、若恐るゝ心あらばこは公明ならぬ爲めのみ、義親一城に主たり、部下數万あり、一身輕きにあらず、而して一女子と共に直き者を責め、罪なきものを苦ましむ、親家の來訪之を詰責するにやと思へば、出て遇はんも恐しく病と稱して親家を歸らしむ、頑冥の人、因循の輩の、常に斯る擧動を爲す。

さるにても親家は親虎の在所をだに知らで歸らんこと口惜しく思ひ、行きつ、戻りつ人に問ひたゞしけれども皆なその在所を知らずといふ、そは城主より堅く命じて人をして親虎に遇はしむる勿れと云ひ置ければなり、されば親家は城を出で、亦會堂に集りける人々に義親が聖敎徒を苦しむる事なきを告げんとて行く、時に新陽東天に輝き、城外の秋氣淸し。

一鞭加ふると見れば駒は亦臼杵の市街に向つて走す、未だ城を離る事遠からぬに、一人あり城を指してぞ急ぎゆく、親家は一目見て駒を止めこはたしかに見知れる面影なり、と思ひ、「汝はこれ臼杵鎭次ならずや」と馬上より云ふにぞ、鎭次は大友家累代の忠臣なり、親虎養はれてより常に之を保佐し、之が顧問たり、されば侍從の臣下を禁じ、親虎を幽居せしむる時も尙侍候を許さる、今親虎より某宣敎師に便して歸途なり、馬上の聲を聞知りしかば「しか云ひ給ふは大友の若君に候か、いざ待ちさせ給へ、申すべき事ありと駈よる、親家亦馬をかへして親虎の事を問ふ、鎭次は語らぬ先に悲しげなり、「今は城内の一隅に賤しき小屋に幽閉せられ、世の知己にも遇ふ事難し、そは城主之を禁じ給へばなり」、といふ、「そは嘗て聞し所なるが我今如何にかして遇はまほし、其方法なきや」と問はれて鎭次は云ふ「城内にて遇ひ給はんは難かり、守衛の隙を窺ひ、主君を城外に伴ひ奉らん、その時を待ち給ふべし」と、斯くて所と時日を約し、鎭次は城を指して、親家は市街に向ふて西と東に分れ行く。

會堂々内人未だ散ぜず、衆人只管義に死せんと勇みけり、義親が兵を出して信徒を苦しむるの事訛傳なるよしを知らざるが故あり、親家今堂前に駒をとゞめ、直ちに入りて衆を諭して歸らしむ、皆上帝に謝して退きぬ。

夜ははや更け靜まりぬ、臼杵市街道ゆく人の音絶え、遠く沙岸に打ちよる波の音ひゞくのみ、燈光明滅寂寞たる城外の賤が家。一室、一人坐して聖經を讀み時に祈禱の聲す、嗚呼如

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

何なる人の此處に夜を更かすらん、今しも讀み居たる經書より目を離し、耳を擧げて聞き、傍らの一室なる侍候の人をよび戸を開かしむ、入り來る二人、先きなるは若武士なり、待ち居たる人を見て、なつかしさ如何計りならん、女々しからぬ身に先づ涙を流し「主にある友よ」と云ひしまゝ、互に手と手を取りかはし、ものをも云はで叫びけり、傍らに之を見る人も思はず袖を絞りけり、嗚呼如何によき信仰あり、心強き人なりとて、世にある限り、人のなつかしからぬかは、さるに小屋の內、人の行きゝも絶えはてたる所に徒然なる月日を送りし身の今は親しき友に訪はる、うれしかる心も理はりとぞ知る。

久しく幽居に苦悶せしかばそが一人ある親虎は色青ざめ、力弱り、身も痩せはてたり、人久しくして相遇ふ時は語らん言葉も出でず、こは語ふことの多くして胸塞がり、何を先きに語らんか、自ら迷ふなり、苦しき事の多からんには涙こそ先きだつなれ胸の中いかにつらからん、親虎は云はんとして云ひ得ず、只親家の傍らに坐して默し、時に涙を拭ふのみ、最も強きもの最も涙多し、泣かぬこそ强けれと人の云ふは己が薄情冷淡なるを示すのみ、眞情豈抑へ得べけんや、熱涙是止むべきものならんや、芳野雪は寒き時、衣川月は冴ゆる夕、萬行の紅涙鐵衣を濕ほせしは是九郎にあらずや。

親家も先づ久濶を序し、親虎を慰め、過る月日のうき苦しみを訪はんと欲すれども其悲しげなるを見てはさすがに問ひ得ず、亦共に涙に咽びけり、等しく是葡萄の枝連なる所は一木の葡萄のみ、彼、我と連なり、我、彼と共なり、ヨシ身は水山を相離るも心常に相近し、一人の苦は他の惱み同情想察誠に深かる可し、嗚呼今夜はこれ何の夜ぞ、上天此友に假すに相語るの時を以てす、そも語り出る事は如何なるべき。

○紀元二千年に於ける女子

エドワード、ベラミー氏紀元二千年に於て女子の有樣につき此頃ろ云へる事あり、曰く若し其時に當つて女子の位置如何を知らんと欲せば今日獨身して生活を營む所の女傑を見よ、彼等は始めに於て必ず生活の困難を覺へしならん、然るに今日に於ては極めて自由に獨立し得るなり、されば紀元二千年に於ても獨身なる女子は其青年なると老年なるものを問はず、容易く獨立し得べし、故に結婚するといふは經濟上止を得ずして良人を求むるにあらで、全く純粹の愛情により嫁するに至らん故に人若し其人物の眞價によつて女子の微笑を買ひ得ば其大ひなる幸福ならん。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

隨感

婚姻箴（下）

カず子

愛は愛なり　「愛は神より出づ、おほよそ愛するものは神に由ッて生れ且神を識るなり、愛なき者は神を識らず、神は即ち愛なれば也」、「主は我儕の爲めに生を捐て給へり、是に由て愛といふことを知りたり」。愛はこれ總ての德の根源にして、天より賜はる至純至高の生命の謂也。愛あるものは七情、雪の如く潔く、花の如く匂はん、されど愛は七情の一には非ず。故に愛は七情轉輾として迸しる凡俗の、得て垣間視得べきにあらず。唯夫れ七情にあらざるが故に、外物の刺擊に依て卒然として來り、遽然として去るを許さず。正にこれ道を直感するに從て、油然として内に熟し、而して沛然として外に現はるゝのみ。ダビデとヨナタンとの如き、玄德と趙雲との如き、其切々の交情、匆卒の瞬間に成れりし如しと雖も、これ彼等の裡に涵養せられつ、將に現はれんと待ち設けたりし愛の、一時に滿足せられたるに過ぎず。蓋し愛は次第に生長するのみ、氣隨に增減するを容るさず。唯他の受け容るゝの度に比例して增減あるべし。これ愛そのものゝ增減するに非ず、其發現する所ろ、或は吸收せられ、或は空しく反撥するに因て、其活動力に增減あるのみ。愛や此くの如きの特性を有す、而して愛の涵養は道を直感するに由來するを知る也。若し夫れ眞の愛は直接に得べからずとし、これに入るの門戸ありとし、其高きものは資性、學識、趣味等より入り、卑きものは容姿、財寶、門地等より入るとし、遂に之を經過して初めて眞の愛に達するとするか。然り、其高きものは卑しきものに對して高からん、其卑しきものは高きものに進むの望みやあらん。去れど其愛の初歩をしてこゝに着けしむる、これ情慾にあらずして何ぞ。吾人は其經過の本末を轉倒するを慨せずんばあらず、況んや愛の情慾と誣らるゝをや。ヨシ情慾の愛と誣ゆる可なりとするも、ヨシ本末を轉倒する可ありとするも、所謂其卑しきものより入るの愛（假りに愛とす）、能く其の高きものに進み得るか、所謂其の高きものより入るの愛、遂に能く眞の愛に達し得る乎。古來幾多の道德を觀よ、皆これ目的を同ふして、而かも儒敎の隱君子を出し、佛敎の非社會的贅物を出し、獨りクリスト敎の活人物

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

(皆全躰に就て謂ふ)を出せるは何ぞや。これ前二者は消極の修德に小心して更生の新生命を姑息の獨修に得んとし、後者は先づ一切を棄てゝ萬有の至源＝道＝と聯るに由に非ずや。吾人は所謂附屬物より初歩する愛の、遂に徒勞あるを憐れまずんばあらず。蓋し進歩とは其特有を變ぜずして歩々改進するの謂なり、變化とは其特有を棄てゝ脫然他に轉化するの謂也。情慾と愛とは抑も其本然を異にす。故に情慾は愛に變化するも、進歩するを得ず。若し夫れ變化するか、これ情慾それ自らより變化するにあらずして、其人自身の變化したるなり。蛇の道は蛇の棲む所ろ、善惡美醜豈に其道を同ふせんや。愛あらば善し、然らずんば煩惱に狂ふ勿れ。

天、時を定む　幾歲、何時までと虛心もて時を定むべからず、況んや私心を以てをや。されど昭々たる攝理の自然は藹々焉として之を定む。吾人少年の時代は男女の愛を起さず、未だ成人せざれば也。吾人修學の時期に夫婦の愛を懷かず、未だ定見なければなり。かれもこれも、攝理の然らしむる所ろ、吾人は自然の攝理の奧妙なるを讚美するのみ。吾人は時を定めず。時は吾人を定む。吾人は天心を確信して再び茲に勸む、凡そ學窓に在る間は婚姻に耳傾くる勿れ、と。愛慮する勿れ、姑息する勿れ。

必成の媒妁　蒺藜豈に葡萄を生ぜんや、葡萄豈に蒺藜を採らんや。愛は愛なり、煩惱に非らず。愛は智、情、意の總稱にあらねど、知、情、意の生命なり。されば斯愛の中には智も、情も、意も含有すと謂ふ可し。所謂附屬物より入るも可なり、眞に人物を愛するに至れるや否やを思ふも可なりとせむ、されど「至らずとせば空愛に狂ふ勿れ、理性をして煩惱に勝たしめよ」とは、そも何事ぞ。愛は信仰の大磐石に立つもの、如何んぞ輕々萍々の投機を許さむや。信仰とは成否を永久に信ずるもの、如何んぞ或る時日を限らんや。吾人この信仰に由て愛を生す、希くは必らず成就するを信ず。ルーテルのキリスチヤン孃を愛せるを見よ、彼れ幾度びか意中を談じて聽かれず、されど彼れ卓然として信じ、淳々として動かず、遂に蜜流れ露滴る至幸至樂の天緣を結びしにあらずや。信仰に由れる愛は斯くの如けむ。されどこれ攝理の媒妁にあらずして、至誠これを成就せりと云ふか、可し、吾人は必らず此至誠もて愛に入る可し。至誠、信仰、これなくんば愛に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

はあらず、又斷じて其愛を成就せざるを信ず。今や婚姻に於ける、世の狀況果して如何。無信、無誠既に俗を成して、肉情獸慾の濁浪、看よ漫々として此民を浸沒し了せんとす。蓋し婚姻は姦淫にあらず、姦淫は婚姻に非らず。而して滔々たる煩惱の大八洲、神聖なる婚姻をして、其實、万般の姦淫を意味せしめ來る。噫、道德の根源、人間の至情已に腐る。宜べなる哉、斯邦の振はざるや。パウロ嚴肅に宣言して曰く、爾曹婚姻の事を凡て貴め又牀をも汚すこと勿れ神は苟合又は奸淫する者の罪を定む可しと。（完）

○小兒の論理　　川合信水

明治二十二年の二月母上の身沒りしより後、幾月の間か、吾れは亡き母に代りて、數へ五歲の小弟を抱きつゝ臥したり。或る夜のことなりき、吾は先づ臥して床中にあり、小弟は喜び躍りつゝ來りて、吾が傍に臥したり、其足の冷たきこと氷の如くなりければ、吾は覺えず「オゝ大層に冷たきことよ」と云ひければ、小弟は笑ひつゝ、廻らぬ舌にて「然らば兄さん、少しは溫かなるか」と申したり、小兒の考、小兒の論理も亦妙なるものなりと感ずる儘に書き記す。

文學

落花

市村高彦

此春も野山の花に引かされてあだにちらしゝ庭櫻かな

評 類歌なくは

朧夜に庭の櫻のちりしきて木のもと白き月のかげかな　仝

明日も亦見んと思ひし花（櫻）あるに惜くも散らす今日風（夜中に聞ゆる風の音）かな　前島むつ子

評 直接の落花にはあらず

夕風に櫻の（花のしら）雪とふる里はまだ春淺き心地こそすれ　江間きよ子

あかさりし花の白雪ふりしきてふむだに惜き庭の面かな　みれ子

徒に風をならうらみん散る花も時を知りてや行べかりける　八千代
（櫻花ちらん心になりにしものを）

春駒

朝まだき霞める（罔）野邊にいさみ立つ（有明の）月毛の駒の聲のどかなり　市村高彦

みくらさへ置く人ぞなき春駒の遊ぶもうれし花の下かげ　美野實子
（世の中のほだしもしらぬ若）

○倭姫命云はく、元を元として元の初に入り、本を本として本の心に任せなば、神明の恵を眷ん。

○春日大明神の神託と云ふものに云く、諸の人たちよ、神明の助を受むと思はゞ、常に慢心を退ぞけよ、譬へば一毛の慢心の神明を隔つると、大雲の如し。

○本と神道は質素にして、人の風俗正直を元とす。歌に、神道は白木造りの茅の屋根、すのこのねだにたてし御鏡。

○八幡宮神託に云く、益人よ、乞食、癩、螻蟻に至るまで、ふかくあわれむべし、恵みあわれみのひろきものは、玉の緒かぎりなく、永く子孫鶴の羽をひろげしが如く、天の神の直き心にもおのづからあるべし、慈悲の海ひろければ、天の月かげをうつせり。

○倭文大明神神託に云く、もろ人の世の人の助けとならん事を常にねがひもし、まなびもし、あらんとのをば、われつねに神力を勵げまして日の本の神寶とせん、いたづらに世の人の國の寶を費やさんをば、かならず我かれをして、そむけて失なはせん、此御言葉はもつて我子孫を思ふ事を、諭し玉ふべし。

時事

○新總理大臣

意外の現象となりぬ。松方伯、大藏大臣を兼つゝ、閣上に立んとは。左れど、之れ其由り所ろあり。願わくは責任を逃れんとする利巧の人、速かに面を露はし、どちらにせよ、堂々たる振舞を爲し、早く政黨内閣の手初めを演ぜんことを。

○條約改正

新總理大臣の爲めにも、今后一般の政況の爲にも、第二期の帝國議會の爲にも、條約改正こそ唯一の難目なれ。毅然たる斷信を要す。朗らかにして廣き公見を要す。相そねまざることを要す。徒らに慷慨せざるを要す。周密敏達に考察することを要す。

○アンチ、フオーレン

攘夷的の精神は見事なるものにあらず、實は野蠻人の醜僻なり。外國人もし不埒あらば、須からく之を憐れみ遣すべし、直ちに牙をむいて憤怒するは、胸中彼れにヒケを取ると自惱するがゆえ耳。あゝ、眞に國を憂ふるものは、ちと度胸を廣

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

大にし、高く放眼して宇内の大勢を觀るべし。蚊が鳴く如くウナリ散らして、西洋人を罵しり、而して之により條約を改正せんとするは、野蠻めける政略なり、悲しひ哉成就せじ。見よ、維新前の鎖國家は愛國家と目されき、もし今日彼を評するの口あらば、少しく省みて可なり。アンチ、フホーレン、スピッツトほど條約改正の妨げするものはあらず。

○伊藤伯、大隈伯

中には策士ありて兩伯を連衡せしめんとす。是れ到底出來がたきことなるのみならず、爲さゞるを國益とす。二伯須からく分明に旗を立て、相分れて上下に說ふべし。恐らくは、政黨内閣之より初まらん。

○時事通信

時事通信社の公判は、端なく今の政德を暴露したり。吾人は白晝臟腑の流れ出ることを醜とす、左れど今の政治界到る處ろとして此を内容せざるはなし。近ごろ、立憲自由子、論じて「先見の明は朴實にあり」と云ひぬ。知言と云ふべし。人を信じ又た時として人に欺むかるゝものにあらずば、遂に安くんぞ得て能く人の心中を洞察せん。

○札幌製糖會社

怪しき風聞度々北より聞えたるが、遂に僞造株券の事確實に分りぬ。道廳の取しまり方不行屆なりしとは、今更言ふ迄もなし。日本の實業社會大ひに改たむる所なかる可らず。

○英國商人

マーキーと云へるもの、橫濱に來り、三百万餘圓を抛うつて日英間の貿易に付、大計畫する所あらんとす。

○獸類逆待論

メール新聞漸やく論じ出しぬ、敢て邦人之に着目せずと云ふと勿れ。着目すると既に久しく、議論亦尠なしとせず。只だ之を實行するの手段に至りては、尙多少の階級を經進まざることを得ざる耳。

○社會問題

日に〳〵近づき來り、彼岸の暴濤夜々聲を高ふして磯邊に寄す。先づ、活版職業の如き器械的の事務尤とも整頓したる邊りより、芽を吹き出さんとす。愛國の徒、切に社會問題に心を注ぐべき也。

○婦女勞働者

田舍に於ける男女共働の風やうやく府下にも流行し來り、今や女の勞働者日に日に增加す。

○盲人

盲金訴訟の特別沙汰はなしとするも、盲人は之に保護を與へねば憫然至極なり。東向會員近ごろの出願、無理にして而して理あり。政府願はくは、目あきの按摩にのみ税を科せよ。

○外賓に對するの禮

露國皇太子を迎へんとす、路に當るもの深く戒愼し、些末も國辱を買ふが如き不用意なからんことを勸告す。大阪府民は藝妓を出して待し參らんとせり、不屆の極なる哉。但だ大阪青年會の如きものありて能く之を制止したり。

○臺閣搖々乎

身ごもりて未だ產れず、早く墜胎し去らんとす。總理大臣の位置何ゆえに斯く危ふきか。

○去就離合

未だ初めより合したるにあらず、離るゝに於て何んかあらん未だ初めより隨ひしにあらず、去るとも何をか惜しまん。結ぶも解くもたゞ勢利耳と觀じけり。あゝ慨すべき哉。

通信

可愛子編

○山梨縣通信　●廢娼演說　四月二十五日夜、東八代郡寺尾村に於て、廢娼演說を開きたり、數名の辨士熱心に論じ、聽衆三百有餘名ありたり、同地方は近來何となく廢娼說勢力を博し、血氣の青年奮て運動する由。

○靜岡縣通信　●靜岡縣尋常師範學校女子部　に於ては、去る四月、十七名の卒業生を出せり。●女生徒の養蠶　本年度(即ち四月)よりは、靜岡縣尋常師範學校女子部にて、養蠶を生徒に練習せしめたり、教諭小笠原利孝氏之を監督す。●靜岡市尋常小學校　にては、高等小學校へ入學する能はざる者の爲め、新に補習科を置き、尋常小學四年期の科程より稍々高き程度にて、讀書、算術、習字、及地理、歷史を教へ、又女生に必要なる裁縫の一科を教ゆ。

○京都通信　●京都府尋常師範學校　に於ては、本年四月一日、六名の卒業生を出せり。●高等女學校教員の交迭　猪熊夏樹氏は、從來師範校の助教諭を兼れて、高等女學校の教諭なりしが、今度兼任を解かれ、津田儀三郎氏も同く女學校教員囑託を解かれたり、粟飯原義光氏は(漢文科に)、西里みち氏(家政科に)、廣瀨さき氏は、囑託教員となり、又梁田邦彥氏梅本從三郎氏同校教諭に任ぜられたり、又原在泉氏の代りに望月玉泉氏は畫學教授に囑托せられたる由。●京都唱歌會　は百有餘名の會員ありて盛なるが、此度高等女學校、教諭猪熊夏樹氏は、歌詞の講義をなし、從來意義を解せず、唯歌ひ唯唱せし空誦的の記臆をさけらるゝ由、喜ぶ可きとなり。●高等女學校　の同窓會は、本月十九日に開きしが、來會者八十名程にて、奏樂演說等ありて盛なりし由。●聖累斯(サンルイス)小學院　當地天主教信徒加古義一氏等の有志家共同して、貧窮子弟の爲めに、名の如き小學院を設置し、本月一日より授業を始め居れり、同院は廣く貧者に教育を施さんと欲するも、現今にては未だ資金の許さゞる所あり、先づ百名(男六十名女四十名)の小兒を定限として入學を許るし、月謝は固より要せず、書籍機械等悉く貸與すると云ふ、當時同教信徒にして小學教員を奉ぜしもの、男女各一名、此が教授の任に當り、文部省小學校規則に從ひて、尋常小學校の課目を授け居れり、生徒は當時男二十人、女十人、教塲は加古氏の邸內に設けありて、淸潔且整頓せり、因に云ふ同院は殊に貧兒と限らず申込むものは一般に教育の任に當る筈なるよし、然し現時の生徒は多く富者の子にもあらざる如し。

○茨城縣通信　●女囚　本縣の女囚は、水戶監獄下妻監獄を併せて、五十餘名あり、女監取締には四名の婦人ありて之を看守せり、其罪狀は故殺罪即ち墮兒等の刑最多を占め居れりと云ふ。

○山口縣三田尻通信　●女子教育協會開會式　は豫定の如く去月二十八日

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

山口高等女學校に於て開きたり、當日毛利元昭公を初めとし、名譽會員毛利祥久氏及夫人、其他來會者二百四拾餘名あり、會員來賓の祝辭、演說等あり、控所に於て茶菓を饗し、同校生徒の書畫手藝品を縱覽せしめたり、聞く處に據ば、同協會の會員は三百七十一人を得、會幹は毛利公爵夫人、副會幹をば縣知事が擔任せらるゝ由。

女報

可愛子編

●婦人矯風會の兒守學校　同會員の發起にて三番町帶坂の愛憐會事務所內に兒守ッパなどを遊ばせ乍ら教訓する學校を設け、去五日より開校したり。

●慈善會寄附金　本月二三四の三日間歌舞伎座に於て開きたる、東京市養育院慈善會の餘興演劇は、千葉、福地、堀越の三氏が慈善會の依賴を受けて盡力したる由なるが、開會の日尙ほ淺きも、千葉勝五郎氏より金百圓、市川權十郎同、壽美藏同、八百藏同、新藏同、猿之助同、女寅中村勘五郎坂東秀調等より、各金二百圓を寄附したり、團十郎は無給にて勤むるゆゑ、五百圓計りの寄附に當ると云ふ。

●女子手藝展覽會　芝公園地の女子手藝學校にては、來る九日彌生舘に於て、生徒手藝品の展覽會をなし、生花茶の湯等の餘興もあるよし。

●英佛兩公使夫人の美擧　英佛兩公使の夫人が本月上旬、居を相州宮の下に移されし際、橫濱婦人慈善會員が貧者又は病者の爲め、大に努力せる由を聞き、何とかして同會を補助せんとて、直に東京に歸り、電信を發して知己朋友を集め、慈善の爲め橫濱山手公會堂に於て遊戲會を催す事とし、去る廿日同會を開きしに、一夜に五百五十六圓の收入ありしかば、當夜の實費四十五圓を引去り、殘余五百十一圓を以て、橫濱婦人慈善會に寄附し、托するに貧者病者の救助を以てせしに、同會も大に兩夫人の厚意を謝し、益々慈善の事に熱心し、慈善病院、孤兒院、幷に女子職業塲設立の計畫を爲し居る由、又同會のバザー及び演說會は、六月上旬を以て催す筈なり。

●女子高等師範學校の教師　南摩羽峯氏は、女子高等師範學校教授に任ぜられ、奏任官三等に叙せられ、年俸三百圓下賜、同教授岩川友太郎氏は、同じく奏任官三等に叙せられ、年俸五百圓下賜、同教授篠田利英氏は、年俸五百圓下賜、坪井玄道氏は、同校教授に任ぜられ、年俸二百圓下賜。

●婦女勞働者增加の奇顯象　都下近頃の一奇顯象として目する者は、婦女勞働者が日に月に增加すると是なり、斯は畢竟男子たる亭主のみの勞働にては、到底一家數口を糊するを得ざるに至り、從て此の慘酷なる無形强制が、遂に婦人を驅りて、勞働に從事せしむるに至りしならんといふ。

●日本胞衣會社　は日本橋區西岸町より、此程同區本石町四丁目八番地へ移轉せしが、今度定欵を改正し、資本金五萬圓を增加して、十萬圓と爲せしに付、右認可の義を仝社長松本亥平氏より、其筋へ出願せりとぞ。

村雲尼　は目下池上の本門寺にて說教し、終れば更に小傳馬町へ移りて、一週間の大法會を營むといふ。

●米公使未亡人の慈惠　相州鎌倉郡中和田村の倉林キヨシ（二十六年）は、先年所天源四郎の病死せしより、出京して麴町區三番町なる櫻井女學校に於て語學を卒業し、一昨年來米國公使舘の通辨に雇はれ、月給の內若干圓を實母倉林ツノ（七十餘）に月々仕送りし處、キヨシも昨年四月中熱病に罹り、同舘にて死亡したり、其際同公使の夫人は之れを憫み、葬儀も手厚く執行ひ、加之老母へも多少の金圓を惠與せしが、今はスウヰフト夫人も同く所天に死別、歸國の塲合となりしに付き、キヨシの墓碑をも立派に建築し、且つ同人の母が外に便るべき者なきを憫み、月々金三圓づゝを生涯惠む事を契約して歸國せられし由、同夫人の慈惠世にあり難き事といふべし。

●婦人雜誌橫濱に出でんとす　主筆は松原千代女子、目的は婦女の輕佻浮薄を矯正し、且其實業を奬勵するにありとぞ。

●ハリス氏夫婦出立　明治女學校教師たりし同氏及同夫人は、二年間休養の見込にて去五日出立米洲に向つて歸省せられぬ。兩君ともに、月琴提琴に堪能にて、特に夫人は茶の湯の免狀を得られたれば、歸米舊知己を多く會するの夕べ、日東の談話を演じ其淸音を奏して我等が事を語らるゝなるべし。橫濱出航の砌りは、其教養を蒙りたる學生多くボートにて送り、旗を揮ひ歌を吟じ、限りなきの別情を表しぬ。

●奉迎と束髮　去る四日、長崎に於て露國皇太子殿下、並に希臘親王殿下の上陸を奉迎する女子は、總て束髮靴を禁じ、日本風となしぬ。

●喜んで讀者に報ず　嘗て都新聞の雜報に、大阪藝妓が、露國皇太子を奉迎せんとする旨記載しありたれば、我社は早速之を同地土佐堀青年會に申送り、此事を問合せたるに、彼等は未だ出願せず、若し願ひ出るも、府廳にては決して許可致さずとの確答を得たりと、同青年會よりして我が社に報じ來れり。

●籠手田知事の夫人監獄を巡視す　前島根縣知事籠手田氏の夫人は、去月廿八日、松江監獄に赴き、殘る隈なく巡視したる由。

●鳥取縣尋常師範學校に於ては　裁縫科教授方囑托四宮マス氏の依賴囑托を解かれ、藤井吉次郎氏、同教授方囑托を命ぜられ、月手當金三圓を支給せられたり。

●大阪府尋常師範學校女子部　は昨年五月の創設にて、去年入學せしもの三十名なりしも、當三月の學年試驗にて二年生に進級せしもの十七名、元級に止る者七名にて、他の六名は、學力不足の爲め退學を命ぜられぬ、而して當三月、入學試驗を經て、假入學を許されたるもの二十名ありき、故に現今在舍生徒は四十四名なり。

●和歌山縣尋常師範學校女子部　は本年四月開かる、同校職員は、近縣の各師範學校女子部に就て、種々取調をせられし由、教員としては女子高等師範學校卒業生太田みつ子（長野縣の人）赴任せらる、猶聞く所によれば、同縣にては、高等女學をも設立せらるゝ由。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●德嶋縣尋常師範學校女子部　は本年の創立にて、生徒十六名あり、女教員には、高木師範學校女子部卒業生伊藤いれ子なり、又同縣の高木女學校は、經費の都合により、今年限り廢されたり。

●札幌女子小學校と札幌女學校　は廿二年七月の設立に係れり、札幌女子小學校は、尋常高等合せて、生徒五百二十餘名、校長小林到氏、訓導（男二名、女五名）、授業生女四名、裁縫教員女三名、事務係男一名、都合十六名の職員を置かる、札幌女學校は、本科、專科、生徒各數名、校長、教員、教室皆女子小學校に同じ。

●北海女學校　は校長北村映吉氏外四名の女教員共力して、設立し、二十四年二月開校せり、生徒數十名あり。

●札幌婦人談話會　は初め講究會と稱したり、廿二年二月十一日、憲法發布の當日、波佐谷みち子（高本師範學校女子部卒業）の發起に係り、同年五月十二日、第一回を開き、以後毎月一回開會す、現時三十餘名の會員あり、德藤まさ子（舊東京女子師範學校卒業生）會長たり、當會は有益なる談話をなし、唱歌の練習、餘興等あり、隨意談話の際は手藝をなし、或は會の備品を作る、時日教師を聘して、割烹の講義を聽き、實施に調理をなすことあり。

●鹿兒嶋婦人衞生會　に於ては、四月二十九日、同市西本願寺別院に於て開く。

●產婆養成所　大日本私立衞生會山口支會附屬產婆養成所に於ては、去る三月二十五日より卒業試驗を行ひ、此程卒業證書授與式を舉行するに至れり、右卒業生は同縣に舉行する所の內務省產婆開業試驗に應じたるよし。

●婦人海外渡航差止め　海外渡航の嚴重なるは、今更申す迄もなき事なれども兎角賤民の婦女は種々の口實を設け、或は僞か夫婦を拵へ、甚しきは戶籍を詐稱し、官吏を瞞着して渡航を企つる者あるやに聞き及びしが、今度神奈川縣に於ては、醜業疑似の婦人は、斷然渡航を許さゞることに決定したりと云ふ。

●海外婦女の取締は先づ內より始めよ　と五月一日の東京日々新聞は論じたり、是れ吾人が平生の持論、喜んで贊成す。

●男女の長壽　長崎縣に於て、昨二十三年十二月末日、現在九十歲以上の長壽者を調べしに、四百六十五人ありたり、內男百二十五人、女三百四十人なりといふ、又和歌山縣に於て、昨二十三年十二月末日の調査に係る八十歲以上の長壽者は、其數三千百四十九人にして、內男九百七十二人、女二千百七十七人なりといふ。

●五月三日の國民新聞に左の記事あり。

●今巴出んと欲す　或る女學校にて生徒の望みとするところを問ひければ答へけり迚女學雜誌に載せし中に、

一番面白きは第一に武藝、第二に音樂、第三に物見することと、とありさては大和なでしこ樣々に吹き亂れたる今日の女學生中天晴れ明治の巴板額を出すやも知れず。

●養鷄は婦人の餘業　たることを望むとの說東京家禽雜誌十三號に見ゆ、兼てより贊成する所ろなり。

●監獄に對する貴女の仁業　に付ても吾人折々意見を述たるが、此頃發兌の監獄協會雜誌第三十六號に同意の反譯を掲ぐるを見たり。

●津田梅子孃の企業　ブリンモウル女子大學にて日本の女生一人づゝを交ぜ教育せんとの企は本誌第二百五十九號に掲げ置たるが、募集金八千弗いよ〳〵出來上りたり、又同女史は更に一年滯在せらるゝこととなりぬ。

●朝鮮に於ける男女の關係　東洋に於ては、婦女を蔑視するの風ありと雖も、其殊に甚しきを朝鮮に如くはなかるべしといふ。

●淸國に於ける矮人の結婚　淸國廣東の嚴某、身の長二尺二寸許、近縣の翟某の女、長一尺五寸の人と、本年二月はじめ結婚す。

●露國ベツサラービヤなるワレンシヤ女子商業學校　にては此度露西亞語學科を設けたり。

●米國の婦人　北米合衆國に於ては婦人の雇吏たるもの追々に增加し、是れ迄は重もに遞信省內に雇ひたるに、近頃に至りては、陸軍部內にても亦た用ゐるに至りたりと、右に付或る新聞記者は、男子職工は頻りにストライキを起すより之れが爲めに女職工を用んとするもの愈よ增し、婦人は久しからずして、總ての職業に入込べしと云へし。

●蠻國旅行の女先進者　一女丈夫あり、探撿者スタンレー氏の蹤を踏みて亞弗利加內地に入らんとす、思ひきや業に既に一女子あり、幾多の辛苦を經て中央亞弗利加に分け入り、多くの探撿を爲せし事あらんとは、此先進者をフレツド、モイル夫人となす其良人はアフリカンレークス會社々長なり、此夫人こそ女子中にては眞に蠻國旅行の最先進者なれ、夫人が經驗せる所は其良人に送りし書簡によつて知らる、モイル氏今此書簡を輯めて「亞弗利加內地より送れる一女史の書簡」と題して世に公にせられぬ、勿論公衆に示さんとて認めし書簡には非れど面白き事限りなし。

●ベサント夫人、ブラツドロー氏を許す　チヤールス、ブラツドロー氏此を知る者何人か驚かざらん、氏が反對黨なるベサント夫人が氏の特性をうつして「評論の評論」に掲載せし所は實に是氏の溫性美質なることを、夫人曰く「彼の靜肅謹嚴なる容姿は寧ろ我英國に見がたき所なれば妾は彼に問ひぬ、何處にて斯くはよき習慣を學び給ひしやと、彼は半ば笑ひ半ば嘗しる躰にて云へり、余は英國社會の人と交はらざりしが爲め居ながらにして學び得たりと、彼は佛、西、伊諸國至る所に於て貴紳貴女に待遇せられたり、此間に知らず〳〵外國の美風を習ひ得たり」云々と。又ベサント夫人が氏を訪ひし時の一記事、讀者の注意を惹くに足らん「いと忙がしき內より數時間をぬすみ、彼と共に遊樂せし時はいとうれしさ過ぎざりき其時の事今記臆するだに愉快なり、彼は魚釣る事の秘術を度々妾に敎へくれたりき、されど妾は釣らんともせざりしが故に彼も重れて云はざりき、妾は彼と共に釣竿をすて置きて或は散步し、或は馬車を驅り、亦はリツチモンドの公園を逍遙せし事もあり、木蔭に坐して談ぜし事もあり、將將彼が法律家となりて議會に入らん時如何になるならん抔語りし事もありき」云々。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●日本全國女學校卒業生人名人數（學校創立より本年四月に至る、）（第二）

●東京の部（二）

●共立女子職業學校 堀かく子 大高つる子 樋口よれ子 田中たけ子 今井ため子 水野よれ子 橋本ゆき子 小關くま子 玉井てつ子 石橋つる子 早川きよ子 飯田ちま子 丸山ひさ子 野村えつ子 藤沼きん子 鈴木たけ子 隈部ひさ子 萩崎ゆう子 眞砂野わか子 鯉さつ子 井戸かま子 田中ふさ子 岩田まさ子 水野さみ子 三浦せん子 今井よし子 那須すれ子 熱田よし子 生田うた子 永井こと子 中山ちよ子 今川ふみ子 田邊あい子 牧嶋なか子 大谷すゞ子 吉岡ひさ子（以上甲科裁縫部卒業）（合三十六名）小坂たけ子 鈴木ぎん子 神田じゆん子 山田きよ子 藤森てつ子 大久保みち子 熊谷まつ子 日比野よれ子 金子ちよ子 肥田れん子 福西しげ子 山岸ぬい子 植野かれ子 宮川たつ子 外山もと子 濱野むら子 古屋ちよ子 中川さう子 中村きつ子 鵜殿みれ子 中村くめ子 鶴田おか子 川上ます子 曾根なを子 福西さら子 城しん子 松本ちせ子 岡本きく子 椎橋せき子 五月女てる子 森川みき子・井上はつ子 横山りう子 奧野ゆき子 武居こま子 吉井てる子 岩間りき子 岡田くに子 六浦たか子 伊藤みつ子 柴田ぶん子 宮本すさ子 和嶋みち子 山本たま子 渡邊しげの 山本なか子 川俣はる子 岡本きやう子 希代てつ子 大沼けい子 小玉けい子 星野さい子 淺井かれ子 林さだ子（以上乙科裁縫部卒業）（合五十四名）（次號に續く）

週報

●官令　二日勅令を以て林務官林務官補營林主事營林主事補及森林監事制級並に俸級の制を裁可公布せらる。

●政治　四月廿八日內閣會議●五月二日樞密院協議會●同日地方官會議●五月より暫時紙面改正準備の爲め民報休刊●六日總理大臣交迭山縣伯退き松方伯進む。

●經濟　四日府縣商業學校長會議。

●衛生　一日赤十字社病院南豊嶋郡下澁谷村字笄開谷南豊嶋郡第二御料地內に移轉す、但本社は依然從來の地にあり。

●業報　四月廿七日、露國皇太子來遊、有栖川威仁親王、太子を軍艦に訪はせらる、五月四日、露國皇太子殿下、希臘國親王殿下、長崎大波止場御上陸。

品名	五月七日
白米（一円二付）一等米	一斗〇升〇合
二等米	一〇二
三等米	一〇八
四等米	一一二
五等米	一一六
正米（一円二付）越中米	一斗五升三合
越後米	一四五
美濃米	一四七
尾張米	一四二
一志米	一三七
雜穀（一円二付）本大麥	二斗四升五合
上州小麥	一六三
竹林麥	一四五
梅澤大豆	二一〇
青柳大豆	二〇〇
吟小豆	一五〇
白胡麻	一二四
黑胡麻	一四三
搗（一円二付）赤穗	表三、二五
大鹽	三、三二
本齋	五、二五
新齋	五、七五
醬油（一円二付）最上	樽八分一厘
極上	九二
上物	一四〇
中物	一九〇
並物	二三〇
味噌（一円二付）地製上白	貫六、七〇〇
同上赤	六、七〇〇
同紅赤	四、七〇〇

品名	五月七日
呉綿（九貫目二付）上入金	円一三一、〇〇
並入金	一二六、〇〇
無銘	一二〇、〇〇
白木綿（一円二付）玉鶴	反三、六〇
綾鶴	三、九〇
日の出鶴	四、〇七
若柳	三、一七
逢萊	三、九七
古新	三、二五
間銘	三、九八
伊勢晒（一反二付）綾川	錢一九六
奈和	一九六
三園	一八三
常盤	一八三
三仲	一八〇
宮川	一七八
実井	一八三
布引	一八〇
夏物（一反二付）都華織	円七、五〇
壁上布	六、〇〇
明石縮	七、〇〇
加茂川縮	六、〇〇
平上布並敷寄屋	六、〇〇
濱縮緬夏友仙	一〇、〇〇
黑絽	七、五〇
同並上	五、五〇
夏御召織上	一〇、〇〇
同並	七、五〇
濱縮緬（百目二付）大巾土刷	円四、八五
小巾百廿目立	五、五五
同並	四、九〇

品名	五月七日
鰹節（十貫目二付）薩摩大	円一六、五〇
伊豆上	一九、〇〇
城の腰同	一八、〇〇
遠州同	一七、五〇
房總同	一五、五〇
銚子節同	一四、〇〇
水戸磐城上	一四、〇〇
南部仙臺大	一〇、〇〇
土佐大	一一、〇〇
製茶（二貫目二付）新駿遠稀頭	円二、五〇
同大頭	二、一五
同中頭	一、七五
同伊豆大頭	一、八五
同中頭	一、四五
古山城江州稀頭	二、三五
同大頭	一、八五
同小頭	一、五五
同中茶	一、〇〇
同狹山稀頭	一、七〇
同大頭	一、三〇
同中頭	一、二五
同中茶	九〇
水油（一樽二付）地水	円七、一〇
胡麻	九、五〇
荏油	一一、四〇
桐油	六、五〇
綿油	六、二〇
坂水	八、一七
石油（一箱二付）チヤスター	円一、六五
ブポース	一、六四
ホーキ	一、六八
ロシヤ	一、六〇

女學生

第十二號

一層改良して出で來りぬ。

春夜明

月の圖あり

細舟錦波の上に棹さし好友互ひに談ず景何如

毎月一回發兌 ● 一冊郵税共六錢

女學生
勉學の一問題……星野慎

まとひの筵
鎌倉、春夜の友……暗光子
小川の流れ……假名子
まとひの唱歌……金光子
枕頭一感（勝敗、勇法、儉吝）……天知子
現出す、無形の人物……川合信水
愛なる哉……方寸子

睦びの家
困苦の軒端（上）……（女子學院）秋野すゝき
性を粧ふ勿れ……（女子神學校）佐藤德子
春さめの涙……（明治女學校）星野ゆう子
私の婚せざる理由（下の卷）……（女子學院）秋野女史譯
手かく事……（女子神學校）森田千子
花開風雨多……（共立女學校）岸多加子
東洋の婦人……（立教女學校）栗原優子
風賊むが如し……（横濱共立學校）岡田於菟子
遼東の豕……（女子神學校）北條衣子

寄せぶみ
愛する妹の歸鄉を悲みて……のぶ
雲峰子と暗光子……川合信水
女學生第十號を讀む……分部盛之
望鄉……望鄉生

學びのしをり
唐詩選解義……
翻譯者（其三）……
文章の心得（其一）……

春の夜ばなし
山姥の怪談。　德川公の感嘆。　東坡小妹に戲る。

女學雜誌社發行

● 女學生全盟各女學校は左の如し
○明治女學校○女子學院○新榮女學校○女子神學校○共立女學校○フェリス和英女學校○頌榮女學校○跡見女學校○立教女學校○成立舍女子部○女子獨立學校○海岸女學校○長榮女塾○東洋英和女學校○青山英和女學校○金城女學校○品田女學校

奥野昌綱翁序　戸川殘花著

讃美歌てびき

定價八錢　郵税二錢

吾人基督信徒に取つて讃美歌の必要有益あるは今日甞事新らしげに喋々を要せん然れども吾人讃美歌を誦するに於て其口調の古韵を踐むと又た敍事の異國に屬するとを以て往々其意味を解するに苦しむとあり夫のみならず此歌は如何なる場合に如何なる人が作られたるかを知らざるが爲め幾千金の玉も其由來を聞かざるに於ては唯通常の瓦石に少し光輝ある位の感じに止まらん鳴呼吾等朝に夕に神に交り信仰を燃し喜ぶ時に悲しむ時に唯一の好伴侶たる讃美歌其者にて一層其由來を知り一言一句も決して苟且ならざるを解するに於ては夫に依つて得る處の感動利益夫幾多ぞや是本書の出づる所以にして又本書の目的なり然して毎章作者の傳記を附せられたる之を讀みて之を味ふて當時の情況を回想し神の榮光の妙へなるを感じて潸然涙に噎ぶの時あらん鳴呼熱信なる詩人にして初めて熱信なる詩人の情況を寫す事を得冀くは大方の諸彦一購以て活ける清泉を汲めよ

發行所　東京々橋區出雲町一番地四辻角　警醒社書店

第二年生

通信女學

新募集

代價一冊前金三十二錢（無郵税）、半年分前金一圓八十錢、一年分前金三圓五十錢、一切前金に非れば發送せず。

明治二十四年一月廿五日第一號を發兌し、以後毎月廿五日に出版して翌一ヶ月中の科目となし、其十二月に至りて全科卒業となす。

東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

文學士日高眞實著

日本教育論

正價四十五錢
郵税六錢

本書は教育哲學研究の爲め獨乙伯林に留學中なる文學士日高眞實先生の著にして先生が嘗て大學院に於て斯學を研究せられたる結果として其一部なる教育の想念を論じて帝國大學に呈出せられたるもの幷に活眼を開て世界の大勢を觀察し今後の帝國教育上緊要なる問題に附き多年の懷抱を吐露して伯林より送附せられたるもの也其文章平易にして論旨明快今所論中一二の重なる點を擧ぐれば教育の社會上幷に國家上に於ける關係、一個人の教育、教員及外國教員のと、國語の教育及其方法、教授の方針等にして幸に一讀の勞を惜まずば教育哲學とは抑如何なる學問なるか、我帝國教育制度の進歩は萬國に對して何等の位置にあるか我帝國々民の教育としては如何なる手段を採るべきか、教育は國家眞正の富强をはかるに於て何程の効力あるべきか、等の疑問に對して亦氷解せらるゝあるべし

發行　東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地　目黑十郎支店

書肆　同　日本橋區若松町廿一番地　榊原友吉

同　同區新大坂町十番地　小林喜右衛門

第三版

百人一首講義

上製美本　五十錢　郵税四錢
並製淡裝　三十五錢　同　四錢

陽春の讀書に宜し
歌留多遊びに宜し
遺物に宜し
詠歌に宜し

女學雜誌社

第三回目 婦人問題演說會 演題は「婦人之特質」辨士はムンチンゲル氏場處は本郷區弓町壹丁目二番地壹岐坂會堂時日は五月十六日(第三土曜日)午後四時より(傍聽隨意)

定價

一冊。	六錢	郵税。五厘	(但府内無郵税)
十冊。	五拾八錢	郵税。五厘	(同前)
半年分	壹圓四拾六錢	府外は	壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は	貳圓八拾六錢

廣告一行十錢。

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY